日本書紀傳 卅一卷十一

百三十二

和書 一〇五二二號

内閣文庫
番號 和 10522
冊數 156 (142)
函號 特 85 1

内一二六八三號

国立公文書館
National Archives of Japan

宮内省圖書寮文庫
宮内省圖書寮文庫

然れども可斗やハ甚く心狹く頑愚なる私曲の妄說ゝ
て實ハ阿須波神と諏訪神との神德をも委しくハ
能も探知る事を得ずして天下の後生の愚弄りす
者あり愼まずハ有べゝず

故大巳貴神則以其子之辭白
於二神曰我怙之子既避去矣
故吾亦當避如吾防禦者國內

内一二六八三號

カミドモ○ヤナラズ　マサニトモニアセキラマシヲ○イマ　ワレ　マツリラハ　サリ　タレカ　マタ。

諸神必當同御宗今我奉避誰復

アヘテ　アラムヤ　マザル　ニハロハ　モノ。

敢有不順者

是大已貴神の全く天神に歸順はせ仕奉らせ給へる件あり右に注せる古事記の文の續きに故更且遥來問其大國主神汝子等等事代主神建御名方神二神者隨天神御子之命勿違白訖故汝心奈何と有を此に敢大已貴神則以其子之辭白於二神白云こと有ハ事代主神の報命を以て天神に白させ給へる所なるが故

あり此に也建御名方神の御事の傳うたるもの正に如此き文の必在べき語勢なる者なり此に其神の傳ハ漏されたりと雖も已に有し事實なりければ其事件を一應辨へざる時ハ其結びに至りて大に意の盡さざる所なる有べきりけり偖此ハ經津主神武甕槌神二柱の建御名方神を追迫させ給ひて信濃國の諏訪の地に於て其神を歸順ハせ給へる其辭を以て又大已貴神に問聞えさせ給へるあり何れも善ハしき御中にて御在し坐けれバ此に於て大已貴神にも迫らせ給へる者の如く思ふハ此凡そ御應對の狀

を能く心得ずして云ふ生賢しき説共あり其は此所
も汝心奈何と懇切に問聞えさせ給へるを以て至りて暁
る可き事なり然れば第二の一書なる大己貴神の言に
疑汝二神非是吾處來者故不須許と有る如きは本より合ざるなり又其記に答白之云
僕子等二神隨白僕之不違此葦原中國者隨命既献也
と有は右に擧たる此の本文の趣にて即歸順の御辞
と申す者なり第一の一書には故大己貴神以其子之辞
報于二神二神乃昇天復命云と有て此にて止めり
者の如く書されたれども此時に復命し給へるは其
神なり天神に乞奉らせ給ふ事有て其御計らひの御
事を伺ひに昇らせ給へるなり此時は直に二神共に

天降らせ給へり其天神に白させ給へる御言と云は
其記に唯僕住所者如天神御子之天津日継所知之登
陀流天之御巣而於底津石根宮柱布力斯理於高天原
氷木多迦斯理而治賜者僕者於百不足八十坰手隱而
侍亦僕子等百八十神者即八重事代主神爲神之御尾
前而仕奉者違神者非也と申給へる是なり即第二の一
書に於是經津主神則還昇報告時高皇産靈尊乃還遣
二神勅大己貴神曰今者聞汝所言深有其理故更條二
而勅之夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則可以治
神事又汝應住天日隅宮者今當供造下略と見えたり此

天神の御答を以て大己貴神より乞奉れる趣の同じきをも知べく又此ぶ二神の昇給ひし其時なる事を明らむ可きなり古ハ此ハ必無てハ條理の貫徹らざる所あるに依て古事記の文をバ下六百二十三丁に引て注せるを以て見合す可き者なり

天神本紀ハ例の記紀と一ハ合せて文を成せるハ住しと雖も大己貴神の隱坐て已神後ハ二神の復命し給へる趣ハ書せる(円)ハ次序違ふ可し故今此を訂し云者なり

○以其子之辭ハ第一ノ一書ハも出なり上ハ問將報之辭ハ有る所ハ時事代主神謂使者曰今天神有此借問之勅我父宜當奉避吾亦不可違と見え第一ノ一書ハも天神之所求何不奉歟と有る是なり古事記の事代主神の御答ハ語其父大神言恐之此國者立奉天神御子云〻と見え又建御名方神の伏罪ハ(ニヅロ)せ給へる所ハ此葦原中國者隨天神御子之命獻と有るどい二神の御方より大己貴神へ仰入らるゝ事ハ(ハ)いい有べけれども其ことをも語聞ゆる義ハ見る可きなり○我白於二神曰ハ第一ノ一書ハ報于二神曰と有て先ハ汝意何如當須避不時大己貴神對曰當問我子然後將報と有る報命を此ハ至りて申せ給へるなり○我(怙)怙之子の怙之ハ多能米理斯と訓べし神武天皇己未年御紀ハ並特(恃)特其勇力不肯來庭舒明天

△二行ハ大船之恩澤而又行ハ念有之奴者雖有憑有之兒等ハ者雖有

皇前御紀ハ于泥備椰摩虛多智于須家苫多能弥今茂
万葉△三 五十七丁 ハ妹毛吾毛如千歳憑有來 又 五十九丁 万代ホ
如此毛欲得跡憑有之皇子乃御門乃四 三十四丁 ハ従元長
謂管不念恃者又 五十二丁 吾乎人之憑而不相可聞十三 二十八丁
ハ大船之憑有時ホ十四 五丁 ハ伊麻思乎多能美波播ホ
多我比奴又十五丁 安礼乎多能米氐安佐麻之物能乎ル
ど有ラ頼ゆて此の怙之ハ俗ハ力ハ爲ラ又ハ頼ミル
思ふるど云ハ等ラ〻して寶鏡開始章第三一書ハ謂ゆ
ラ汝所行無賴と有ラ其反ラ纂疏ハ子怙其父則父
亦怙其子故曰我怙之子と注させ給へり此所能爲ス
ハ大ハ義理

（日說ト仍賴也 詩曰無父何怙無母何恃ノ義）

（又辭憑有之人乃事）

（泊瀬王忠發病薨之後辛丑日我生之誰侍矣と云るも此の語勢ハ似たり又哥ハ）

を取違ふるハ至ラ可し此文の任ムてハ大己貴神其
自答奉ラセ給ふ可き事を事代主神を以て申さしめ
給へラ意ハ容易く避奉ラ可きハの怙ミル御在し
坐けるを案外ハ速ラカハ避奉ラさせ給へラ故ハ因御力
を落して此言を申給へラ○既避奉ハ事代主神建御
如く聞ゆラ有り心得べし
方神等のあり古事記ハ此所を僕子等二神隨白僕
之不違此葦原中國者隨命既獻也と申給へラ所是ハ
ラ即大己貴神の先ハ避奉ラと申させ給へラ後ハ御
子神等を今避給ふ可き事ある者ラ〻其ハて他の
從神等ハ共ラ〻ハ陽安ラ〻ざラ故を以て直ハ天神の
御使稲背脛命を遣して其報命の辞を問給ひ又建御
名方神の如きハ二神の追迫給ふ任ムて其歸順ひ

奉る可き時を下待ー御在ー坐けるふ思をすが如
く不違我父大國主神之命不違兄八重事代主神之言
此葦原中國者隨天神御子之命獻と申給へりけれバ
其事共を相兼て我怙之子既避云と申させ給へる所
あれバ右の子字も子等の如く訓べき所あるありけ
るー○吾亦奉避ハ古事記ふ此葦原中國者隨命既獻
也と申給へる是ゆて神賀詞ふ謂ゆる現事顕事を事
避奉るを給いしとあり其ハ神賀詞ふ天穗比命云
〻己命兒天夷鳥命ふ布都怒志命副天降遣云
〻國作之大神子媚鎮天大八島國現事顕事令事避支

と見えたる此文ふ次て乃大穴持命ふ申給久云八
百丹杵築宮ふ静坐支と有を右ふ對へて八百丹杵築
宮ふ静坐天神事幽事所知食支と見べき文あるあり
鈴屋大人の後釋ふ現事ハ宇都志許登顕事ハ阿羅波
ふ許登と訓べー同意ある事を如此狀ふ二ッ重ねて云
ハ古今の常あり」と注されたり但式の舊訓現事ハ阿
羅此登許登顕事ハ阿伎良米許登と有り此事菅家名
義抄ふ出たるふ顕事の方ハ阿邪良米許登と有り
先其訓義ふ明らめ注す可き者あり先其現事ハ現
人事と云事ふて其現人と云ハ景行天皇四十年御紀

傳サニ百四十ふ注らかゆく

ふ日本武尊の御名乗坐りふ吾是現人神之子也と詔
給ひ雄略天皇四年御紀ふ葛城一事主神より天皇を
指て現人之神と申させ給へり御事見元續後紀十九
ふ毎皇ふ現人神止成給と見元和名抄神靈類ふ現人
神日本紀云現人神和名安良比止加美と見元たり現身又ハ顕
身と云事ふて現存の世人を云が天皇ハ其現人を御
めさせ給ふ神ふて渡らせ給ふ由あり又万葉六三十六丁
ふ住吉乃荒人神舩舶ふ牛吐賜拾遺戀四ふ住吉の現
人神ふ誓ひても忘らず君が心とり聞く又神中抄ふ
天降り現人神の相生を思へば久し住吉の松あり也

詠て此神を現人神と申せりハ現形しして征韓の御事
を助奉らせ給ひ其後宮處求ふ天下を巡らせ給へれ
ばあり後拾遺雜三ふ天皇も現人神も和むりて鳴け
り杜の郭公哉と有ハ八幡大神を詠奉り續詞花ふ思
出ハ無名を立ハ一本無名立つ身ハ憂りきと現人神も一本ふ
有し昔とと有ハ北野御神を詠りあり共ふ現人ふて
御在し坐しが神と成らせ御在し坐りを云あり偖大
己貴神ハしも大國主神とも顕國玉神とも申奉りて
此時現人神ふて渡らせ給ひて天下を惠くふ主領せ
御在し坐けれハ其御職を指て現事と申せりあり

即天下を造らせ御在り坐て國土を惣有たらせ給ふ御事業を申奉れりあり然れば事の言輕く心得べうず其事業を云て其事業と云ハ常も予が云ふ如く此漂在る國を修理固成の事を行させ給ふ御事を申奉る事實ふ決き者あり鈴屋大人の宇都志許登と訓れたるも此意ふ見て現身の事業と心得るふ於てハ次うも違ふ所無くあり有けり顕事を阿伎良米許登と訓るハ此第二ノ一書天神の御言ふ夫汝所治顕露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事と詔給へるを大己貴神の御答ふ吾所治顕露事者皇孫當治吾將退治神事と有て顕露此云阿羅憔貳と注せる是あり備天皇の御事を〻も出雲神賀詞ふ明御神ふ大八島國所知食天皇命と有と始〻て續紀の宣命及中臣壽詞等ふハ現御神と作らを万葉六四十三丁ふ明津神吾皇之と有て即顕世の神と申奉る御事あるふ孝德天皇御紀大化元年ふ明神御宇日本天皇二年ふ明神御宇日本根子天皇又現爲明神御夫八島國天皇（天武天皇十二年御紀ふ明神御夫八洲日本根子天皇）と見えたる明神又現爲明神を阿良美迦微又阿良美加度とも訓る阿良ハ皆顕露の謂ゆて右ふ謂ゆる現人神の人を略けて唱ゆて其意ハ明津神と申すふ異あらざるあり備其阿伎良米許登ハ明所見事あり火名義抜ふ阿邪良米許登と有ハ鮮所見事る万葉十六三十丁ふ明久吾知事乎十八二十丁ふ御心乎

安吉良米多麻比十九三十九丁の秋花之我色〻を見賜明
米多麻比二十二十五丁の毋能其等を佐可由流等伎登賣
之多麻比安伎良米多麻比又五十一丁安伎良氣伎名を於
布毛能乎るどの阿伎良未是めて天下の大御政を所
聞食し明らめさせ給ふ御事を申奉れるあり又其阿
邪良と云る阿邪ハ鮮明ふして隠るゝ所無を云あり
先朝と云ハ物の隠れて見えざりしが鮮明ふ成初る
時を云ひ淺と云ハ物の顕ハるゝ称あり字鏡集ふ札
を阿邪波礼流と訓るハ淺張(アサハレル)有り疥を阿邪乳を阿
邪加と云ハ外ふ鮮明ふ出(いで)たる物の謂あり又潮を阿邪

行小見明良米海也良牟等久

波夜加と訓るハ新撰字鏡ふ瑳を鮮盛之貌阿佐夜加
ふと有ふ等しるる可し然れば阿邪良米許登と云時
今日人の所作ハしも相共ふ見られ知られ隠るゝ所
無きを云て共ふ筭二ノ一書ふ見えたる顕露事を云て
此時まで大已貴神の所知食し御在し坐ける御政を
避聞えさせ給へる者ふふ有ける下六百五十四丁ふ神事
幽事を云所ふ合せ讀て曉る可き者あるゝ然れば現事ハ
現人事ふて天下ふ在ゆる現人の成す所の事業を云
て此ハ人の産業ふ抱ハる事ふして天皇の御上ふて
ハ天津日嗣と申して天下の人民の貢賦を所聞食す
御事を申奉り顕事と申すハ天下の人民の邪正曲直
の狀を明らめさせ御在し坐て各捉させ給ひ治給ふ
大御政を申奉れるあり口訣ふ顕露之事謂ふ治國之政

務也と注し纂疏に顕露之事人道也幽冥之事神道也猶晝夜陰陽二而爲一人爲悪於顕明之地則帝王誅之爲悪於幽冥之中則鬼神罰之爲善獲福亦同之神事則冥府之事非祭祀牲幣之礼也祭祀猶屬顕露事と注せ給へり是なり ○如吾防禦者の防禦者を保勢賀麻斯加婆と訓う瑞珠盟約章に防禦を私記に不佐久と訓う其事は傳十六十五に注に寶鏡開始章第三の一書には距之を布世具と訓うに就て傳サ二二百六十五丁に注るが如く防禦は其道を塞ぎて其中を令伺ざる由なり此も其如くにして大己貴神の天神の詔命を皆き奉り其道を禦塞し障へ奉らんと申給へるに其天神の大命を畏畏 聞えさせ給ふ由を懇切に申させ給へるなり源氏桐壺十六丁に荒き風防ぎ一蔭の枯しより小萩が本ぐ静心無き蓬生十六に霜月に成ぬれば雪霰勝にて云し朝日夕日を防ぐ蓬葎の蔭に深く積りて野分十二に荒き風をも防ぎ給ふ可くやと浮舟一に防く可き人の御心狀なくねば狹衣二下五十九丁に我着給ひたる白き御衣の云し山風も甚荒げるを防ぎ給へとて給はすれば布世具も塞ぐふて能通ゆるなり金澤本も同じく保具世賀麻斯加具又布世具など種しく波と訓う同じ言を右の如く布佐有べきなり故思ふに伏塞の切うたるなる可ければ保世具ふに在べうすと雖も此訓を失ひしも猶しければ本の任なり ○國内は久奴知

と訓べし大祓詞ハ國中ニ荒振神等ヲ波ハ云ヘ國中ニ成
出武天之益人等我云ヘと有を後釋ハ此ハ俗ハ國中
と云意あり久奴知と訓べし万葉五六丁ハ久夜斯可毋
可久斯良摩世婆阿乎ニ與斯冬久奴知許等其等美世摩
斯毋乃乎十七三十九丁ハ安麻射可流比奈ニ名可加須古
思能奈可久奴知許登其等と有ハ依れり補意と云ふた
るが如し○諸神ハ諸國神諸ハて大己貴神の御治め
を仰從ひ奉居る國中の諸神あり即上章第六ノ一書ハ
大己貴神の興言曰夫葦原中國本自荒芒至及磐石草
木咸能强暴然吾已摧伏莫不和順遂因言今理此國唯

吾一身而已と有が如く凡天下ハ在ゆる諸神ハ一神
として非ずければ如此ハ宣べりあり然るハ傳ハ九
卷ハ注るが如く天下ハ在ゆる國主神の主宰ハて渡
らせ給ふが故ハ大國主神と申し諸國の地を主領り
名持神の君長ハて御在し坐を以て大己貴神と申し
又其和魂荒魂の御上ハて也諸の物主神諸の國魂神
などを從ヘさせ給ふ其首渠者ハて渡らせ給へるを以
て大物主神大國魂神などゝ御名ハ負せ御在し坐ハ
り此を以て第二ノ一書ハハ是時歸順之首渠者大物主
神及事代主神乃合八十萬神於天高市師以昇天陳其

誠欵之至と有て此時の天神の大命ふ宣領八十萬神
永爲皇孫奉護乃使遷降之と見えたり然れば此ふ國
内諸神と有ハ其等を差て申させ給へりある事照し
應せて知べき者ふあむ有けり但彼殘賊强暴横惡之
等ハこ神ふ言向させ給ふ可き由を申して平國之廣
矛を授させ給ひ又岐神を鄕導として薦めさせ給へ
りを思ふ可し○同禦ハ寶鏡開始章第三一書ふ衰神曰中略如
何乞宿戒於我遂同距之と有ふ依て登毋尓布世岐弐
麻斯袁と訓べし纂疏ふ大巳貴神大造國家威澤日久
國内生靈惟命是聽故曰如吾防禦國内諸神必當同禦
是教誡之神之言也と注させ給へりい實ふ然る言ふ

り登毋尓ハ万葉十二ニ十一丁ふ朝且草上白置露乃消者
共跡ニ師君者毛十六十一丁ふ事之有者小泊瀬山乃石
城尓毋隱者共尓莫思吾背大和物語ふ嘗ふだれ我來
かとへ露の身の消ハ共ゆて契ゆ置てさ新六帖ふ如
何ふ爲む死ハ共ふと契ゆ身の同じ限の命ゆくずハ
あど有う古今昔下ふ散る花を何う恨こむ世中ふ我
身も共ふ在む者うハ秋ふ川風の涼しくも
有かう寄う涙と共ふ秋ハ立つむ金葉雜上ふ神垣
ふ昔我見し梅花共ふ木末に成ゆけり哉伊勢物語
ふせをハ取て共ふ率て往けり
と有ふど何れも同トくふ等し○誰復敢有不順者ハ
事代主神の御言ふ我父宜當奉避吾亦不可違と申し
て已ふ避給へりけりふ其後の事ハ古事記ふ故尓問

其大國主神今汝子事代主神如此白訖亦有可白子乎
於是亦白之亦我子有建御名方神除此者無也と有け
らふ其建御名方神ハ已ふ和順ひ仕奉られしらバ自
餘の國神ハ左も右も大己貴神の御趣ふ從奉り居て
異しき心有べからざる由を明らめ申させ給ひけ
ふて次ふ引ら事古事記ふ亦僕子等百八十神者即八
重事代主神爲神之御尾前而仕奉者違神者非也と申
させ給へらハ其御子神等の御上ふ一て此ならハ上
章第六ノ一書ふ謂ゆる吾已權伏莫不和順と見えたる
其限を宣へらふ大倭神社注進狀ふ傳聞八千戈神

者大己貴命以廣矛爲杖今撥平豐葦原中國之邪鬼是
時大己貴命号曰八千戈神と有が如く彼石根木立草
の片葉も言語一ひら邪神ふ鬼の類と雖も此大神ふ
ハ權伏られ奉りてらふ靡從ひ仕奉り居たりけれバ
此も大己貴神の防禦かせ給へらふふハ渠等も共ふ防
ぎ拒ひ事も有るあども其大神の避奉らせ給へら上
ハ誰らハ競奉らひと申して次ふ平國之廣戈を奉ら
せ給へらハ若防禦ぐ者の有るふハ此を以て權伏
せ撥平させ給ふ可き由を含て然るふ聞えさせ給
へらふハ有ける然れバ此の本文次ある廣矛の所へ
續く可き所ある事灼然一然れども

此ハ次ハ舉ラ文を補ひ見ずして凡ての事ハ指支
へし區〻ハ成ル故ハ今亦古事記を引出て注す者ハ
ウ

古事記曰。尓答白之。僕子等二神隨白。僕之不違。此葦原中國
者隨命既獻也。唯僕住所者。如天神御子之天津日繼所知之。
登陀流此三字以音下效此天之御巢而。於底津石根宮柱布刀斯理。此四
字以音於高天原冰木多迦斯理多迦斯理四字以音而。治賜者。僕者於百
不足八十垌手隱而侍。亦僕子等百八十神者。即八重事代主
神。爲神之御尾前而。仕奉者。違神者非也。
上四百九十三丁ハ已ハ且〻注ルガ如く第二ノ一書ハ二神の
天降リ御在リ坐て問大巳貴神曰汝將以此國奉天神

耶以不對曰。疑汝二神非吾處來者。故不須許也。於是經
津主神則還昇報告時高皇産靈尊乃遣二神勅大巳
貴神曰。今者聞汝所言深有其理。故更條〻而勅之。下略と
見えたりけり。此御事の次第を深く探り遠く索めて
明〻ハ爲ずして。ハ凡ての事實說べ〻ばかり如
〻所有ハ依て今其條理を先此ハ注す可し。其問大巳
貴神曰。汝將以此國奉天神耶。以不と有を此ハ其御
答ハ當問我子。然後將報。第二ノ一書ハも對曰。吾兒事代
主射鳥遊遊在三津之碕。今當問以報之と見えた古事記
ハ僕者不得白我子八重事代主神是可白ゐど有て

△記傳廿三ノ十ノ末
逆来ノ信濃ノ事ニ
ヨリ汝ニ案何ノ初ノ
問給ハ一時ノ僻ニ有
不得自ニ有テ自ノ御
答ニ有ラズ故ノ如ク
問給ヘルヨリ有如ク

何れも其趣みして異なる所非るが上ノ猶建御名方
神の事故有て引續きて專御事のゝ例御在ノ坐て然
後ノ大己貴神の御心をとゝ問せ給へりける然るの
疑之汝二神非是吾處者來故不須許せと直ノ答させ給
へるこゝろ心得ね先ノ天穗日命大皆飯三熊之大人の
追次て天降らせ御在ノ坐て豫め國避の御事謀爲さ
せ給へりければ其消息を以て復命ノ給へるを今度
ハ其先ノ降坐ノ其稲背脛命を先立て表立たる大御
使ノ天降り御在ノ坐て其大御命を述て諾否を聞名
りノ疑之と云語ハ一も假ノも宣ひ出させ給ふまじ

き御事なり非是吾處者と云も如何國避の御事ハ一
も大己貴神の御許ノ御在ノ坐て問聞えさす可きノ
何れか神の許を差て至らせ給ふ可き故不須許せ
と有ハ何事ぞや上八十九丁百四十三丁ノ注るが如く大己貴
神の國土を經營らせ御在ノ坐て主領せ給ふ御事ハ
皇祖天神の詔命ノ本著き天神御子の御爲ノ大造の
功績を建させ御在ノ坐けるかこゝ有けれ所以ノ天
穗日命三熊之大人なども其神を媚和ノ聞ゆる方ノ
力めて追却くなどゝ云事ハ御在ノ坐ず此ノ二神の天
降らせ給いても大己貴神を御畝とハ爲させ給ハざ

りけり然りを於是經津主神則還昇報告と有れども
何れも雄武の神にして然る不遜の傲言を聞して其
言を持て復命申さる可き事にハ故此を以て思ふに
古事記ハ僕者不得白云しの事を此ハ其神の諾ハせ
給ハずして其初然る御言を出させ給へる者の如く
意を得て其一家ハ傳へたりし私説とこそハ見えた
りけれ口訣ハ疑之汝者咎二神之胷狀爲私以伏理還
也と云ひ通證ハ重遠曰大己貴神疑無勅命不
皆許二神後世征討使賜節刀爲證以此也と云ひハ如
何ハ以此國奉天神耶以不と宣給へる其即天神の勅
命ありて御在坐やハ後世の征討使ハ節刀を賜ふ
ハ其味方の人ハ征使の表として爲ること
有けれ何ぞ敵ハ征使ハ節刀を授け給ふ事の有る
もの口訣ハ其二神の勇狀あるを以て私と云ふ

ども口ハ任せ
たる謾言なり偖二神の還昇にして報告させ給ふ時
ハ天神の大命を持して還遣して大己貴神ハ勅爲さ
せ給へるハ今者聞汝所言深有其理更條〻而勅之と
見えたり汝所言とハ右の疑之二神非是吾處來者
故不須許也の言を聞食て何ぞ深有其理とハ詔給ふ
可きハ允理と云ハ言割の義にして其云ふ所ハ就
て事の條理を裁断つ謂なりければ其條理を裁断つ
程の言も無きハ何をか深有其理とハ詔下さる可き
故次ハ條〻而勅之と有を以て大己貴神ハ天神の
御許ハ申させ給へる御事ハ條〻の有けむを受けて其

中に給ふ所の隨ひて行下させ給ふ大御政御在り坐
けり御事を見奉り知べきあり今其條々を計へ見る
に第一條に曰く夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則
可以治神事と有り是なり第二條に曰く又汝應住天日
隅宮者今當供造即以汝尋榜繩結爲百八十紐其造宮
之制者柱則高大板則廣厚又將田供佃又爲汝往來遊
海之具高橋浮橋及天鳥船亦將供造又於天安河亦造
打橋又供造百八十縫之白楯と有り是なり右に擧たる
古事記の文に如天神御子之天津日繼所知之登陀
流天之御巢而治賜者云々と見えたる即天上なる天

忍穗耳尊の天津日繼所知食り御在り坐す宮殿の如
く爲て治させ給いつる可き由を請奉らせ給へるなり
此第二條に其大宮の狀を以て大己貴神の天日隅宮
をば令造給ふ可き由の御返事あり第三條に曰く又當
主汝祭祀者天穗日命是也と見えたる是なり此三條
を以て治させ給いつる事を皇祖天神の御許に請奉
らせ給ふ其如く制可し詔下給へるを以て右に擧たる
古事記の文の所在を知べく且は二神の大己貴神
の言を持て天上に還昇らせ給へる時をも知べし又
右の疑汝二神非是吾處來者故不須許也と云文の古

傳ふハ非る事を知べきなり是此ふ古事記を抄出て
ゆゑ愚見を述る所以なる者なり天神本紀ゆい石の十六字を書さずして
文を列ねたるハ住し平田史ゆハ其文を取て文を
成せるさへ有ふ直ふ復命せる事を書して事代主神
建御名方神の國避をしも其後の事と爲るハ其見解
宥之ゝ云て大己貴神を しも不議の神と爲るハ如さハ
言ふ断たる曲説なり又纂疏ゆも亢有人久保非分之
地一旦王者勅興理當收焉別必爲之處漸令彼退避謙
讓是可矣不能然擅權起其攘奪之心彼亦損命相拒是
招乱之道也天祖恐有鑑此機故曰聞所言深有其理而
殊下制誠爲彼計畫慇懃丁寧如此則誰人逆天命坐取
敗乎大己貴神避國長隱誠有由哉と注して給へれども
大己貴神の深意を本らず妄しくも揺ぶせ給ハざるう
けれハ強事なハ
ざる事を得ず

右 六百十ふ 五丁 注せる 我怙之子既避故吾亦當避と云ハ

ふ其三神より故子等事代主神所建建御名方神三神者隨天神御子之命而遣白詐故汝答何之有ら御答ゆれハ此も此葦原中國者隨天神御子之命既獻せり云ふ義なり事中すれ更なり此ハ天忍穂耳尊ハ天神の大命を受て
皇子ハ天神の大命を受て
くせ給へふ御子此神
問の御言ハ問事
ふ係て問も答も有
事なり上十五段ゆも云ふ
注てるゆ如し 倩此

當れり○此葦原中國者隨命既獻せハ其上文ふ二神
の天降來坐る所ふ問其大國主神言天照太御神高木
神之命以問使之汝之宇志波祁流葦原中國者我御子
之所知國言依賜故汝心奈何と見えたるを其時ふハ
僕者不得白ゝ申給いて直ふ天神の御使天鳥船神亦
名稲背脛命を以て其報命を所聞食し次ゆい建御名
方神も二神ふ追迫られて天神の大命を恐ミ仕奉り
せ給へれハ其餘の諸神ハ大己貴神ゆふ從奉らせ給
へる上ハ防禦奉る者ゆ有べくもなりけるとゆ悉く
ふ見濟し給ひて此ふ其御答を聞え奉らせ給へる所

ふ謂ゆる現事顕事を避奉る給ふ謂ある事右六百十六
丁ふ遊〻〻注るが如〻記傳十四三十七丁ふ既ハ常ふ云
と ハ異ふ〻て此ハ皆悉と云義ある」と云れたるハ然
る言ある伊勢風土記ふ吾國悉獻於天孫と有る悉ハ
此の既字の用ひ所ふ在り四神出生章第十一書ふ此
二門潮既大急瑞珠盟約章ふ神功既畢其第三一書ふ
其素戔嗚尊所生之兒皆已男矣と有るど皆悉の意ふ
る事傳十三九十九丁十五二十八丁十八四十二丁ふ注せるが如〻
又記傳ふ此記序ふ已因訓述者詞不逮心と云ひ万葉
十七巻ふ天下須泥ふ於保比底布流雪乃と詠るど
も皆同意ある繼体天皇御紀ふ全字を須傳ふと訓ま
既字ハ盡也と注せり春秋ふ日有食之既と云る類ふ

ふ然れバ須傳ふと云言ふ此字を當てる
も本ハ盡の義ふ因れるものなり」と云れたり ○唯ハ記傳
ふ天下ハ悉く献るむ其中ふて唯ある」と注されたり
故思ふふ彼天下の現事顕事ハ悉ふ避奉る今るハ
八十隈千ふ退居る神事幽事を治給ハむ爲ふ唯吾住
所而已者と顕世るる齋るれさせ給ふ神宮を請申さ
せ給へりあれバ唯住所の〻ハの義ある四神出生章
第六一書ふ唯有朝霧と有る朝霧而已と訓添る例ふ
倣ふ可〻〻允恭天皇八年御紀ふ大御歌阿麻哆絆泥受迩多儴
比等用能未續紀第廿五詔ふ大保辛波多伎仁郷止能味波多
ど多ら〻格ふて是の〻と一向ふ云時の辞ある記傳ふ後世の

文ふ多陀志と云意ふ自然通へり」と云れたれども但
ハ上ふ云る事を戻く義有を此ハ唯ハ御住所の事の
ミを申させ給へるなれバ違ふ可し平田史
ふ此を多陀志と訓るハ其説を安ふ取れり○吾住所
者ハ唯字ふ引合せて住所而已者と訓べき事右ふ注
るが如し然して住所を記傳ふ師の須美加と訓れた
る宜し所字即加の意なり」と有り儀式大儺の祭文ふ
穢久悪伎疫鬼能所〻村〻ふ藏里隠布留乎波千里之外四
方之堺東方陸奥西方遠値嘉南方土佐北方佐渡與乎里
知能所乎奈年多知疫鬼之住加登定賜比行賜氐と有
る住加即其證なり拾遺雜丁ふ山あらぬ住處數多ふ
聞く人の野伏ふ疾も成ぬる哉詞花久〻今ハさて已

若紫詞ふ京の御住處尋て時〻の御宿息ふ從有り

が住處と絶ぬとて木葉の下ふ鴛鴦ふ鳴ある源氏桐
壺十七ふ亡き人の住處尋出たりけむ帚木三丁ふ石の
大臣の勞ハり傳き給ふ住處ハ此君も懶うくして未
摘花四丁ふ打解けたりけれ住處ふ居奉りて夕貝ハ丁ふ唯無
速き一節ふ御心留りて如何ある人の住處ある
ハ往來ふ御目留り給ひけり蓬生四丁ふ親の御影留り
たる心ち爲ら古き住處と思ふふ慰ことあり有り字ふ
ハ栖とも棲とも須美加と訓りる字書ふ栖宿也禽鳥
所宿皆謂之栖と注し棲遲息也卧也と云り住家と書
ハ俗ある又住所をバ字の如く須美存許呂と訓と有
あり伊勢物語ハ段ふ昔男有けり京や住憂うけむ
東の方ふ行て住所求むとて友と爲る人一人二人し
て行けり松風卷初丁ふ寢殿ハ塞げ給ハり時〻渡り

給ふ御住所ふ一て浮舟巻三丁ふ偖暫時ハ人の知まとらぬ住所一て云しさも有れバ然も訓つ可き所あり

ふ○天神御子此ふハ瑞珠盟約章第一の一書ふ出たるを始として何處ふも天孫と書けたり良海本ふハ所の狀ふ隨ひて天御孫とも天神御孫とも作るが共ふ其唱ハ天神御子なる可き事傳十六五十一丁ふ已ふ注し奉るが如し但此ハ國神の御方より崇め申す稱なる事今云限ふ非ず○天津日継と申奉り御事ハ第二の一書寶祚之隆當與天壤無窮者矣の所ふ就て傳世生二百五十十丁ふ乎女一く注一奉る可き其太抵ハ傳十六七十一丁十八五十三丁ふも注一奉るが如し瑞珠盟約章第一の一書ふ

以日神所生三女神令降於筑紫洲因教之曰汝三神宜降居道中奉助天孫而爲天孫所祭也と有て此ハ素戔嗚大神の後度ふ天降り御在一坐ける時の御事ふて此ハ遥ふ以前の事なれども已ふ天降一て天津日嗣継を所知食一め奉り給ふ可き機此ふ已ふ御在一坐けるふ合せて其第三の一書ふ日神より素戔嗚尊ふ汝若不有奸賊之心者汝所生子必男兵予以爲子而令治天原也と有て其神の男御子を生出させ給へりしふハ御子と爲て令治天原とハ詔給へるふて是天上ふ於て天津日継とハ定めさせ奉給ハしるる

△狀ハ後の國司の任國ふ赴くべき以前より在京して其國司のなかに成りけり
旅ふ北天忠穂耳尊ハ天神の御事依と蒙り奉ることを給ひて
其後天降りを給ふ時此國ハ我平らふ後て天上ふ還上しを給へんと
も己ふ其大命と受奉りを給へり云主張たりを給へる天津日繼ふて渡
りを給へる御事申すも更なり者

り然して其神の赤心此ふ表はれさせ給ひて男御子を成し出させ給いけるふ其物根の方ふ主と屬奉らせ給ふ可き由有ふ故ふ以爲日神之子令治天原と所見なる是天上ふ於て天津日繼所知食させ御在し坐るなりけり此ふ大國主神の唯僕住所者如天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巣而治賜者と有ハ天上ふ於て天忠穂耳尊の天津日繼所知食し御在し坐す皇宮の如く造しを賜ふる可き由と請奉りを給へるふ

下ふ於て出雲國之多藝志小濱造天之御舍之有の是なり者

古語拾遺ふ謂ゆる如天上儀と云ふ當れり玉垣宮段なる其出雲大神の修理我宮如天皇之御舍と請奉りを給ふ御事の御在し坐るも先天皇の御舍と云物の有る其制ふ擬ひて修理りを給ふ可き由の願言なるふ思合せて曉る可きなり然ればなる右の所知之を舊訓ハ斯呂志米佐牟なれども然未來へ係て云べき所ふハ非ず此御天降以前ふ已ふ天上ふ在る現在なるを差るなれば斯呂志米須と訓ふ非ずして ハ恊ハざる所なる者なり此御天降以前ふも其天忠穂耳尊の御事を太子と申し奉る事其記ふ所見たり其比都岐能美古と訓奉る可き所なるも天津日繼の謂なり

○登陀流ハ記傳ふ二義ふ說れたれども予が見とハ異なり先其說を辨へて次ふ云べし其一ふ云く登陀流ハ富足

の意あるむり富ハ美を省く例有り其故ハ先古も今
も人の家の富り事例ふハ炊烟の繁く起つ由を云ひ
貧しき事ふハ炊烟の發ぬ由を云事下巻高津宮段ふ
於國中炊烟不發國皆貧窮云々於國満烟故人民富ものと
有が如くあれば炊烟の稠く發つ事を祝て即富足と
云習ひしけむ然れば此ハ炊烟の繁く立登り天之御
巣と云事あるむり上代ふハ此炊烟の騰り處を重く
爲けり故ふ然富足しふ祝言も有り又今此ふも主と
云るある可し明宮御宇天皇の大御歌ふも〻知陀流
夜逆波毋美由と有り知陀流ハ此の登陀流と同くて

此ハ富を切めて知と云あるむり百千足の義ふハ非ず
然れば繁く烟の發騰り百の家庭の見ゆる由あり又
烟の繁く立を見給ひて富足れりと思をす意と爲む
も同ト中略又神武天皇御紀ふ細戈千足國と有り千足
も同ト事ふて炊烟の繁く起て富足國あり借今大國
主神の已命の御舍の構を如此く乞給ふハ專御膳の
事ふ就てある故ふ其御厨の構をしも乞給ふあり然
れば天津日繼所知と有も彼日給の稲以て炊き料理
ふる御膳を所聞食す其御厨の如くふと云意ふ續け
る事明しけし又其御厨の中ふも彼炊烟の騰り所を

重く爲る故ふ分と天之御巣を云あり（下略）と云れたり
富足の說ハ然も有べし然れども富と云事ハ傳五十
丁ふ注せる如く本ハ御殿の事を云りければ炊烟の
事ふ見るれたりハ後ふ云ふ貧富の富と同ト意ふ見
て云說あるが故ふ此ふい叶ずや有らむ其上此ハ其
造宮の制を乞給へるふて御厨の事ふ非れば其將如
何ある可き事次ふ云ふ如天之御巢の說を見て知べ
し（且又）其上千足國ハ万ふ物の足ひたる由又毛ミ知陀流
ハ百千足ふて弥庭と續けるハ國の秀とも云べき庭
ある地を見行し給へるある可らりければ此の引合

ふハ在べらるべりける者あるをや且千足國とハ富
をバ百富足とハ如何ても云るべりりける如く思ふ
又知を炊烟の事ふハ迂遠くしと古意とハ見えず此
ハ次ある擇ハ王神の件を思ハれて此を第二一書ふ
引合せて說べき所ある事を思漏されたるけるが故
ある可し其一ふハ大殿祭詞ふ此乃敷坐大宮地底津磐根
乃極美下津綱根波府出能禍無久高天原波青雲乃靄
久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久と有り血垂も同ト但
此ハ即彼烟の騰る處の名ふして云るあれバ知陀理
と訓べし彼登陀流天之御巢と云を切めて直ふ天之
知陀理と云るあり飛鳥乃禍とハ此血垂の處ハ屋を
普遍して開たる故ふ虛空高く飛鳥の或ハ毒物ふ在

れ何ふ在れ昨持來又ハ糞あどふ在れ竈上ふ隙ーふ
ど爲ふ事の有ひと云ふ可ー下略と云れたるも甚ど
き强說あり古の天之血垂ハ下津綱根ふ對ふる所ふ
ーて謂ゆる簀子ハ綱を以て結縛ふ物ありければ其
ふハ這虫の禍非せーとあり天之血垂とハ血ハ茅の
借字ふて神武天皇戊午年御紀の茅渟を古事記ふ血
沼と作ふも此例あり然ーて其下ふ引結帶目能緩魯
此取菖計草乃噪岐無久と有ハ右の下津綱根ハ出ふ
食ふれば緩び天之血垂ハ鳥ふ喙ふ時ハ噪くふ者
ある由あり此を以見れば天之血垂とハ屋と云ふ

其茅を下ふ草と云ふを万葉十六三十一丁ふ茅草苅草苅
婆可ふと有ふ如ー今も俗ふハ茅草と云事あるが凡
屋を建ふふハ木と草との用のー有て木神を久ぐ迦
智神と申ー草神を草野姫神と申せるふ草の用の最
大あるふハ屋ふ菖ふありければ血垂ハ茅垂ふて草を
菖垂ーたるふて垂木あど云と同例あり顯宗天皇御
紀室壽御詞ふ取菖草葉者此家長御冨之餘也と有も
屋の外まで菖餘す者あるを以て茅垂ふ義とも曉ふ
可ー然れば上古の屋と菖ふハ茅を用ひたるーー故ふ
此を天之血垂と云ふありければ此の登陀流とい

本より日を同じくして語り可きばり程の事なれ
ど有ける其事ハ予已く祝詞講義に注せりと今ハ改
出て次り此に辨ずるのみ又記傳に云く祝詞考の血
彼文を能見よ御殿の下方と上方とを相對へて綴れ
る文なりし底津磐根に極と高天原云しの極とを對
へたれば其次の下津綱根に對へたる天之血垂も必
御殿の上方屋根なり所と云る事明らけき者をや」と
云れしい實に然り說なり　借此に八登陀流天之御巢と有を次に
ハ神産巢日御祖命之登陀流天之新巢と見えたりを
出雲風土記楯縫郡條に所以号楯縫者神魂命詔五十
足天日栖宮之縱横之御量云々と有り五十足を或說
に百千足の誤なる由なれども推量の說なれ取に足
ず内山に眞龍が解に五を衍として十足と爲るも私說
なり文の例を誓ふるに神魂命詔之十足天日栖宮と
有けむが之を五に誤りて下に屬たるし者なれ實に
登陀流の正字ハ右の十足なる可し然して神武天皇
三十一年御紀に謂いる細戈千足國應神天皇六年御
紀大御歌の茂く智儀蘆夜珥波毋弥喩又ハ古事記朝
倉宮段歌に毛く陀流都紀賀延波など有て百足千足
百千足なども物の足ひ鏡ハへる狀を然云なりけれ
バ此の十足も其例なれて天神御子の天津日継所知食
し御在し坐す天上の宮造の制を乞奉らせ給へる所

△万葉七行ハ安治村ナ依海ト有ハ荒唐ハ非ず魚ある〻果ハ事ニこそりて大ハ極少て冨業ゆるさ有り

あるをもて△古今集歌ハ此殿ハ諸も冨けり福草の三端四端ハ殿造爲り」と詠るあゞと同ト心ゆて御殿（とゝく数と給へる其数と）數ハ然百千（ゝゞ）と以て云べゝ（ゝゞ）ゆゑ故ハ十足とハ詔申させ給へりあり推古天皇二十年御紀ハ歌夜須弥志斯和鐵於明耆弥能詞句理摩須阿摩能椰蘓（椰）詞礙と詠りハ安見知ー我大君の隱坐す天之八十蔭と云事ハて言意ハ天之八十御殿と申ーて皇宮の御盛なる狀を詠りあり又古事記朝倉宮段大御歌ハ毛ゝ志紀能淤冨美夜比登波と有て大宮の發語ハ百數と云る數ハ宮柱太敷立あゞの類ハて屋をトる地を屋敷と云む

が如く皇宮ハーも群卿百官の舍宅を多く敷く謂ハと冠辞考ハ百磯城の義と爲られたるとハ異あり斯りけれバ此も其等の意味を含て十足とハ云るハて此ハ炊烟の發る謂ハ非り事ハ下ハ於底津石根宮柱布刀斯理於高天原冰木多迦斯理而と有ハ照ー應せとも其宮の造制ある事ハ知ゝゝゝあり斯れバ大殿祭詞ハ謂ゆる天之血垂と此の登陀流ゝハ本ゝ別事ハーて一ふハ云ゝゝゝ事共あり但此を十足と云ふ十ハ鎮魂哥ハ依ハ多理の切れる者ハーて自然ハ物の足整ふ事と云称りハ成れるハれバ又其心ーて見べゝ事云も更あり然れバ冨足と云れたるハも其意味有り（ゝ下ハ其由ハ考ゝと給ふ任ハ治給へり宮ハ由下ハ皆ハ注ハ如ー見）

○天之御巢ハ天之御舍（下ハ造）と云ハが如く次ハ謂ゆる於高天原神産巢日御祖命

之登陀流天之新巣ハ十足天之新宮と云事あり備此
等の巣ハ其宮殿（住所）の事と云ふて古事記ハ顕宗天皇の
大御名と袁祁之石巣別命と申奉らと御紀ハ播磨國
縮見石室ハ遁（蟻道カ）ひさせ御在ー坐ける事のー有と風土
記ハい隱於惟村石室と有り然れバ暫時ハても其石
室と住所と爲せ御在ー坐けるを以て石巣別命と
ハ申奉るあり和名抄涯岸類ハ洲ハ雅云水中
可居者曰洲李巡曰四方皆有水也音州和名須と有い栖
巣等の義あり大羽族體ハ巣孫恒回切韻云鳥巣在穴
曰窠音科在樹曰巣音曹訓須一穴曰垣栖鳥雞曰塒音時和名止久須久須不

（合丹後風土記ハ伽佐郡有道祖嶽郡所以号道有佐昔天火明命就到之此之時隨從往乎求会斯以使行蟻喰明見之神在穴巣國天火明命詣田食之土神云ふ汝有神祠云賜巣今称阿良須神記也と有と住處と爲る故ハ巣ハもし右ハ三事あり）

良と有り須久不ハ其巣ハ〜て栖む所を喰持來て成
せり由あり枕草紙八五十三丁ハ鼠の未毛も生ぬを巣の
内より數多轉バ〜出たりと云りるとも鳥あるとも虫
ハも何ハも云語あり備右六百二十九丁ハ注せり住所ハ更
あり人の所を得て其ハ在著〜事を須牟と云も巣群（スムレ）
の義ふて即人の住所と巣と云ふ是あり斯うけれバ
天之御巣と云事ハ〜も天之御舍と申さむハ違ひ有
まじき者ありけり但天日隅宮とハ日隅と御巣と同
ド事ハ誰〜も思ふ事あれども然
ら義ありバ〜ハい爲べうざるあり西蕃ハても古
ハ穴居野處せりを神農氏と云百て舟楫宮室と造り
事と教ふ此ハ因て有巣氏の名有り是巣ハ鳥虫ハ限

△靈異記下巻ニ底掃地天生西方極樂頭鷲同住天上宮堂者宍ニ書シテ地ニ巣ニ居ル巣ハ鷲ノ巣ヲ云フ

らず人の居宅をも巣といふ云ふ○如ニ記傳ハ那斯氏と訓めれども其名登久忘氏と訓べし垂仁天皇の大御世ハ其大神の御祟り御在シ坐シ時ハも修理我宮如天皇之御舍者御子必眞事登波年と喻シ奉らせ給へり御事古事記ハ所見たり其如と此ると同ドくて造宮の制を天神御子の天上ゐて天津日継所知食シ御在シ坐す御舍の狀ハと乞奉らせ給へりあり然るハ其朝倉宮殿ハ幸行河内ハ望登山上望國内者有下上堅魚作舍屋之家天皇令問其家云其上堅魚作舍者誰家答白志幾之大縣主家ハ天皇詔者奴辛已家似天皇之御舍而造即遣人令燒其家之時其大縣主懼畏稽首白奴有者隨奴不覺而過作甚畏と有ハ過ちて造れりと雖も天皇の御舍の如くあるを以て如此く咎めさせ給へるあり皇極天皇三年御紀ハ蘇我岡の奴ハ天宗を滅して日位を頭もと爲シ時ハ蘇我岡大臣蝦夷兒入鹿臣雙起家於甘橿岡称大臣家曰宮門入鹿家曰谷宮門谷此云波佐麻称男女曰王子云くと有ハ上御朝廷谷朝廷と云事ゐて朝廷の名を僭ひ王子の名を用ゐるを以て其製樣全く天皇の御舍の如くあり事を知べし然ハ神代ハ已ハ皇祖天神の定めさせ給へり法則

紀事ハ下巻ニ注ス

の有て漫に犯し造り可うべきや御定共己に御在し坐けるありけり此御咎めの己に御在し坐けるを思へば上古より天皇の御舍と臣民の家とは甚く制様に異り有ける事を知べし然るに上章冥五ノ一書に素戔嗚大神の檜皮可以為瑞宮之材と有は皇宮の御事なり次に板可以為顕見蒼生奥津棄戸将卧之具と有は即民庶の家屋を云なり事傳廿八巻に注せる事共を考合す可き者なり

偖此大國主大神の住せ御在し坐ける宮都は古事記に所見なる御父大神の御事依しに其汝所持之生大刀生弓矢以而汝庶兄弟者追伏坂之御尾亦追撥河之瀬而意礼為大國主神亦為宇都志國玉神而其我之女須世理毘賣為嫡妻而於宇迦能山之山本於底津石根宮柱布刀斯理於高天原氷椽多迦斯理而居是奴也と所見なるが如く宇迦之山本宮に渡らせ給へるを其造宮の制は一も然計の御勢ありて御在し坐ぐ猶天神御子の御舍の如くは爲させ御在し坐さりしなりけり然して此時に至りて今はて現人神にて渡らせ給ひし間に所知食し御在し坐ける現事顕事をも天神御子に避奉らせ御在し坐て御身自は八十隈千に隠れさせ御在し坐て神事幽事を所知食させ給ふと爲ては其鎮まり御在し坐す宮の制をば以前の狀に易て天上にて事始させ御在し坐て天神御子の住せ給ふ十足天之御舍の

如く造らしめ給ふ可きを乞奉らせ給へるかて此時
ふ至るまで天下造らしめて大神と坐て國土ふ在ゆる
諸神を從へさせ給ひ滄海原潮之八百重を悉くふ主
領りらせ御在し坐と雖も天神ふ對ひ奉りてハ斯計り
已命の御上をバ慎しらせ御在し坐けるありけり又今
ハ天神御子ふ相並バし御在し坐て神事幽事を所知
食させ御在し坐が故ふ万ハ天皇の如くふ會釋ハせ
賜へらむ御事と天神ふ如此ゆむ乞奉らせ給へるか
ハ有ける簀二一書ふ見元たる天神の其ふ對へらせ
給へる大命の中ふ又當主世祭祀者天穗日命是也と

詔ひ下給へるを以ても此らり以後の狀ハしも化て
天皇ふ准らへさせ給へる御事をゆむ見奉ふ知べり
りける然れバ此を唯ふ造宮の制のみと乞奉らせ給
が故ふ万の事をしも皆がらふ天皇ふ仕奉るが如
く治りさせ給ふ可き由と天神ふ申させ給へる者ふ
ふり
ける　偖其造宮の制ハしも傳十九　五百二十二丁ふ注るふ如
く古語拾遺ふ今下手置帆負神彦狹知二神以天御柱大小
斤雜器等伐大峽小峽之材而造瑞殿古語美豆能美阿良可兼作御笠中
及矛盾と見元たる是天照太神の日宮の御事ふして
其制有る始是ありり若て第二一書ふ見元たる天神の
大命ふ又汝應住天日隅宮者今當供造即以千尋拷縄

結爲百八十紐其造宮之制者柱則高太板則廣厚又將
田供佃又爲汝往來遊海之具高橋浮橋及天鳥船亦將
供造又於天安河亦造打橋又供造百八十縫之白楯と
有ハ全く天神御子の宮制の法なるを其か准らへて
今此ふ令造給ふとあり柱則高太板則廣厚ハ此ふ謂
ゆる於底津石根宮柱布刀斯理於高天原氷木多迦斯
理是あり又將爲田供佃ハ傳十九十九丁ふ注せるが如く天皇の
供御の料の營田ふて出雲風土記ふ天御領田と云る
准らへ給へるふ
是あり高橋浮橋天鳥船の如きも此を以て見れハ其制
又爲汝往來遊海之具ハ句ふて次ふ ハ内重外重の御溝水ふ橋
を架し船を浮べさせ給へるふ其天鳥船ハ船ふ遊ハせ給ふ用ふ充給へ
有て漫ふ用ふ可らざる者と見えたり又於天安河

云くと有り天安河ハ天上の河名あり此天日隅宮の
側の河を其ふ准らへさせ給へるを以て其天之御舍を
移して天上の儀式の仕ふ行はせ給へり御事と見奉
り知べきあり百八十縫之白楯の事ハ出雲風土記ふ
所以号楯縫者神魂命詔之十足天日栖宮之縦横御量
千尋栲縄持而百結ニ八十結ニ下而此天御量持而所
造天下大神之宮造奉詔而御子天御鳥命楯部爲而天
降下給之ふ時退下來坐而大神宮御裝束楯造始給所
是也仍主今楯桙造而奉於皇神等故云楯縫と見えた
り是あり此を以て上天ふ在て天忍穂耳尊の皇宮の

御有狀を想像り奉り可く又大國主神の其造宮の制の如く治させ給へる御事を乞奉らせ給へる御旨をも推量り奉り可き者あり〜此の如と云ふ一字の爲ふ思ふ先ず長説ける事を〇不用なる事の如く思ふ輩の爲ふハ甚包括さ事なれども予が心ふハ如此云へても猶云足ハめ心りの爲りハ記傳の説とハ甚く異なる故なり○於底津石根ハ其記ふハ何れふも如此有り神武天皇元年御紀ふハ於底磐之根古語拾遺同段ふも底津石根ふ作れるを今本ふ底を斯多と訓りハ誤なり二共ふ字の如く曾許と訓べき事云も更なり祝詞式ふハ大殿祭詞ふ此乃敷坐大宮地底津磐根乃極美云〜と有るの〜〜て外ハ何れ

（下ふも地下者於底津石根ノ見ル）

（此此）

ありふも下津磐根ふと有り古ハ（天皇）御殿ハ更ふも云ず凡人の屋ふ至りまでふ柱を立りふハ地の中を堀穿りて其底ふ在る所の磐石を柱の居所ふして建る故ふ如此ハ云るなり故又大殿祭詞ふ齋鉏ヲ以氏齋柱立氏と有り此事予已ふ講義ふ注せれば就て見べし○宮柱布乃斯理ハ神武天皇元年御紀ふハ太立宮柱拾遺ふハ宮柱布都之利立と見え祝詞ふハ何れの所なりふも宮柱太敷立氏と有り宮柱の宮ハ御屋ふて御屋の柱と云事なり布乃斯理ハ右ふ引る第二一（書）柱ふ柱則（高）太板則廣厚と云る是なり斯理ハ斯伎ふ

（先舍宅を造るふ其初ふ地を穿ち柱立を堅固ふして後ふ屋を宅後ふ外の牆を作整ふ者なり故ふ其柱の事ふ就て於底津石根云ふと云ふ古の名稱なり）

△記傳十等ふ先て上代ふハ神宮も人の舍宅の如く地を掘て柱を立る此伊勢神宮なども想の如く地を掘て柱を立る此称辞ハ有なり石根ハ敷礎と爲るなハ非ず地底ふ木を埋り有る石根まで深く掘て立ちと云ふ歟ふ今世ふも殿の家ふハ是有り掘立ごとるなり地上ふ礎として立るハ後の事なりと有なり猶

△万葉二十ふ真木柱太心者と有も此ふ據て詠るふ柱の太きこと云ハば其相應ふ屋の高く大きなる詞なり

て揮を布伎とも布理いも山振を山夫伎とて山夫理
とも通ハ〳〵云ふ同じく敷あり偖敷と云ハ地と占ら
事ありて柱と地ふ居ることを云ひるが即大地の根底ら
柱を卓立り申ゆ堅固ゆ〳〵動ぐら義あり○於
高天原記傳十六十ふ布刀斯理ハ祝詞共ふ太知立と
も太敷立とも廣知立いも廣敷立とも有り其ハ師説
ふ万葉二十七丁ふ天皇之敷坐國等と云ひ祈年祭詞ふ
皇神能敷坐島能八十島者あど知坐を敷坐と云たれ
バ知と敷と同じと有り偖此称辞を古來唯柱の上と
の〳〵心得たれど然ふ非ず今考りふ万葉三十五丁ふ定

二行ふ太敷為京乎置而二行ふ飛鳥之淨之宮乎神隨太布座而又

之水穂國乎神隨太敷座而あど有り例を思ふ宮柱
布刀斯理も其主の其宮を知坐を云あり布刀も右ふ
万葉ふ柱ふ〳〵で國を知坐ふも云ハバ唯廣く大きふ
いふふ称辞あり布刀御幣布刀詔戸太占あども云り
故廣知とも云ふ〳〵斯ハバ此語ハ專柱ふ係りふ
ハ非ず其宮の主ふ係ける語あるを布刀と云が柱ふ
縁有〳〵宮柱太とハ云係て兼て其宮をも祝たる者
あり偖此称辞ハ万葉一十八丁ふ御心乎吉野乃國之花
散相秋津乃野辺ふ宮柱太敷座波二十八丁ふ由縁毋無
眞弓乃崗ふ宮柱太布座御在香乎高知座而又六十四丁

ふ續麻成長柄之宮ふ眞木柱太高敷而又四十三丁山代乃
鹿背山際ふ宮柱太敷奉高知爲布當乃宮者二十五十丁
ふ可之婆良能宇祢備乃宮ふ美也波之良布乃之利多
豆くるど有り採取と注きれたるかて通えたり其五卷鎮懷石
哥ふ阿米都知能等毋ふ比佐斯久伊比都夏等許能久
斯美多麻志可志家良斯毋と有り志可志も古の例ふ
て知爲るるが其長歌ふ美豆豆可良意可志多麻比豆
ゝ有れば此ハ置く事と志可須と詠りありけり然れ
ハ知るも敷とも柱を居置く事かて
其即其宮の主の知り義なりあり
○於高天原ハ記
傳十六十一丁ふ深くぜ云りとて於底津石根と云りふ對
へて唯高き事を云ふ古言あり大祓詞ふ高天原ふ耳
振立聞物止馬搖立氏と有も唯馬の耳高く振立と云

事あり此を高天原ふ坐神等の耳振立と心得るハ古
言を知ぬ僻事なり と云りたるが如く常ふ高天原ふ
神留坐るゝ上天を指て云とハ別かて此ハ冰木の
虛空ふ聳元たるを云あり大殿祭詞ふ此乃敷坐大宮
地底津磐根乃極美云と云る其ふ對へて高天原波
青雲乃靄久極美天乃血垂飛鳥乃禍無久と有も鳥ふ
どの飛度る虛空を高天原とハ云るなり○冰木ハ其
國作段ふハ氷椽と作き御天降段ふハ氷木と作り祝詞式
ふハ何れも千木と有り神武天皇元年御紀及拾遺ふ
ハ榑風の字を用ひられたり記傳十六十二丁ふ和名抄古

本は搏風辨色立成云搏風板比豆揚氏漢語抄説同と
有り流布の板本には比豆と云事無くて和名如字と
有り太神宮延暦儀式帳にも正殿一區云〻上搏風肆
枚長二丈八尺弘八寸厚四寸号称比本外宮儀式帳にも比疑高知
天と所見たり名義は氷木千木共に肱木にて其比知
の下を省けりと上を省けりとの差のみあれば本一
の名なり故に通はしたるなり和名抄に桁比知岐功
程式云肱木と有は別物なり凡て物の形の〈如此〉
りと比知と云ふ千の肱も此意にて号けたり又肱金
肱折なども同じ其比は本布理の切りたるにて布理

どは右の形の如く本は一にして斜に左右へ末の分れ
たる物を云言なり和名抄に杖極方言云河東謂樹岐
曰杖極和名末多布里なども云名是なり根分髪と云も
頭上にて左右へ分れたる狀を云ひ道程などに此處
と彼處との中央なる所を布理分と云も此より出又
物の正直にぬを布理の有と云も此より出たり偖
此比木と云物は上代の家造に屋の左右の端に在て
其本は前後の軒にして上にて棟にて行合ふと組
違へて其末を長く上へ出したる物にして其棟より
上へ高く出たる處を氷木とは云なり貞和錫記に組

△伊勢神宮に今ふ樓風の文字すなはち千木ふ用ふるなり

目上謂千木組目下謂樓風と有が如く棟より下ふて
ハ即多理木と並て同じ狀なる故ふ椽字を此記ふハ
當又屋の左右の妻ふてハ樓風と云物なる故ふ書紀
ふハ其字を當られたれ然れども是等ハ棟より下ふ
ての名なれバ共ふ氷木ふハ叶ぬ事ゞ取要と云ひたる
此ふて氷木千木と同物又樓風と椽と一物ふて其妻
ふ在と平ふ在との差有のみなる事も知られぬ和名
抄ふ欀釋名云欀音襄和名太流岐楊氏漢語抄云波閑
岐在穩旁下垂也兼名苑云一名橑音老一名椽音傳間
杣唐韻云音人漢語抄云闌間杣太留木と有り来家漢
語抄ふ椽多流幾字圜云桷垂四屋之木也故名之と有
ふ如く垂木の義なり又波閑木と云ハ延木なる歟上
ふ延たる木の由なり通證ふ此樓風の字ふ依て風本

菁
△其ハ貞觀儀式大嘗宮條ふ構以黑木葺以青草其上覆黑
爲町形以黑葛結と見えたる町形ハ姓氏録ふ謂ゆ回町形の事なり
木
て本と組交へて物爲事
事
ふて此ふ謂ゆ千木なる事なりふ記ての說なり

の義と爲られたるハ宜しからず又氷木千木の名義ふ今一の考有り
先和名抄織機具ふ縢四邑字苑云縢音勝織機卷經之木
也楊氏漢語抄云織縢知岐利と有ハ中細くして端の開
きたる狀物を組交へたる如くなれバ知岐利とハ云
なる可く物の輕重を正すふ杠枰と云物有も其量り
物と權衡と相平等なる爲ふ狀此千木の組交へたる
狀上の平等なる並べられ此へて可し又人と物と契
約する事を知岐流と云も物と組交へたるふ等しく
うけ合ハ為めに斯る時ハ知の一言ふ物の行合ひ組
交ふ意有と見えたりけれバ千木と交木の義と見む

ふ僻事なり〳〵此ふ准ひて比木ハ合木の略なり
ものと思ひる事ハ新古今ふ住吉の十木の片挨行山邊で霜置遮ふ冬ハ来ぬけり住吉御歌の歌とて夜や寒き
き衣や薄き片挨の行合の間〳〵霜や置〳〵也又我恋
ハ千木の片挨固くの〳〵行逢て年の積りぬる哉なむ
有と頭昭説ふ千木とハ神社の棟ふ在る木なり片挨
とハ棟上ふ打挨て力の様ふて在る木なり」と云るか
如く何れにふも片挨ふ行合ふ事を云るハ下より延續
けたる榑風の行合て棟上ふて千木と云名ふ成る所
の絲狀なるを云なり此を以て千木ハ交木冰木ハ合
木ふて同物ふして異名有りと雖も其義の歸ぶく所ハ

力の様ふて在る木ハ僻事なれども片挨ふ行合て細交ふ謂なり石ふ引る歌其の

竹取物語ふ九月の大炊寮の氣炊く屋の棟の都見の穴毎ふ蕪菁葉を作侍るべき有り都見ハ知波の轉りなり思ふ
ども今ハ知れず布ふ切れなりて棟の交ひ合たるとて即千木の風穴と云なりけり

然る意なるべし

一なりければ今試ふ云なり然るハ右ふ云ける布
著ぎる心の爲なる故なるべし比知木の下略
ハ冰木上略ハ千木なれども別ふ枅を比知岐と云ふ
事の有て正〳〵其當れり思〳〵れば
但此ふ取ぶるハ其名義の説なり凡てハ甚し
愛く〳〵て此大人なる人
の得言出ぶる名説なり因て上代の宮造ふハ千木
と並びて堅魚木と云物有り古事記朝倉宮段ふ有上下
堅魚作舍屋之家天皇令問其家云其上堅魚作舍者誰
家答白志幾之大縣主家ふ天皇詔者奴乎已家似天皇
之御舍而造今燒其家と見元なり堅魚ハ貞觀儀式ふ
大嘗宮正殿一宇と有る下ふ甍置五尺堅魚木八枚著
榑風と有と大嘗祭式ふハ著高榑風と見元て高榑風

いと云ハ右ハ注せるが如く組目より下の屋ハ副たり所ハ搏風なりと其組目より上をバ高搏風とハ云るなり然して著搏風とも著高搏風とも有ハ其組目より上なる所ハ著て千木の堅めと爲る事なり可し以黒木爲町形以黒葛結之と云るハ其堅魚木をも葛ハて著ハ結著る由なる可し然れば上堅魚作舍屋と云るハ其相離れぬ物なるが故ハ片方を取出て詔給へるハて其上なる堅魚ハ千木をバ結著る物なりければ此を以て似天皇之御舍とハ咎めさせ給へるなりけり其ハ上代の屋ハ何れも椽を棟ハ合せて謂ゆ

△此を以て見れば本朝事始ハ白三吾仁德天皇八年庚辰三月始制漢家之從傳三學宗通　官王仁之奏本朝制殿之擅觴也云事ハ有れども猶ハ此の狀の宮造なりし事と知べし此制の改りて神社ハ白三宮ハ別なれるハ欽明天皇の御世なりとか

る千木の狀なりつゝし事ハ論無きを其組目の所ハ堅魚木を著るハ神武天皇元年御紀ハ峻峙搏風於高天之原に有が如く虛空ハ高く峙だる計ハ物爲る事なりければ神宮の制ハ別ハて皇大宮の外ハ恐憚りて然物爲ずと御定なりの御在て坐けゝ此ハ其千木を以てハ咎めさせ給ハず堅魚を上たるを以て罰給へるなりけゝ然れば堅魚木と書ハ借字なりて傍木の義なりて其搏風を結著る料なるなて甚く上代より有來る者なりけり記傳四十一十一ハ其形の鰹節ハ似たる故の名なり」と云れた

れども後に出来れる鰭經節に其形と云ひ名も似たるふこころ有けれ神代の太古に然り巧なる事に未及ぶ可くも非ず且石の儀式とも榑風衣著と訓れて榑風に著と云事とハ未心著れきり說あれば凡て叶ひ難き故に今も事の因に驚り置あり又記傳に云く愛宮郡雲畑村と云村の民の家に今も棟に加都宇木と云て有て風の防ぎと爲り其外凡て田舍の草葺に棟に雀踊と云物有も同ト事なりと云り此說實に然り可し」と云れき但上世の八千木と持堅り料なりと此い其と同じき物なり故に其名を借用いたりもと有けれ堅魚木とハ似て其用ふる狀異なる者なり

○多迦斯理ハ記傳十六ノ四丁に此も雄氷木の事なるに非ず主の其宮を知坐すと云ふ多迦も上の布刀と同

トく称言あり續紀九聖武天皇即位時の詔に天下乃政平弥高に弥廣に云く万葉六十七丁に八隅知之吾大王乃神隨高所知流稻見野能大海乃原笑又三十二丁自神代芳野宮に蟻通高所知者山河乎吉みと有り此哥以て意得べし宮に云れば宮の高きを云ふハ非ず天皇の此宮を高知坐る事明らけし偖氷木ハ棟上へ高く上る物なるが故に其に云係て兼て其宮をも祝なる事專宮柱布刀斯理と云に同じ又万葉一十九丁に芳野川多藝津河内に高殿平高知座而又二十二丁荒妙乃藤原我宇倍に食國平賣之賜牟登都宮者高所知等六

十三丁ふ八隅知之和期大王乃高知爲芳野離宮者又四十三丁宮柱大敷奉高知爲布當乃宮者又四十四丁吾皇神乃命乃高所知布當乃宮者と有るも是等も皆天皇ふ係奉りて云ふと合せて思へ備此宮柱云〻水木云〻と云ハ甚し上代より定まれる宮造の称辞ゆへて甚も雅びたる詞なり略と注いれたるが如くなむ有けり若此水木の高く峙てる事を云へバ其釣合ゆへ宮の大ゆへて廣き狀見るが如くなむ有るハ甚い上れる代の文ゆへて人智の及ハざる所なるむ○治賜者ハ今まもハ現人神ゆへて渡らせ給へれバ其神宮も何も御自營ませ御在坐て住せ給へるを此ふうハ八十隈手ふ隙り侍らいせ

御在坐む宮を天神御子の天之御巣の如くして齋祭らせ給ふ可き由を乞奉らせ給へるゆへ此治と云ハ垂仁天皇二十五年御紀ふ載れる倭大神の御言ふ大初之時期日天照太神悉治天原皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神我親治大地官者略と見えたる是なり備神を齋く事を治と云る事ハ傳廿九百十丁ふ注るが如く上章第六一書ふ幸魂奇魂神の宮處乞ハせ御在坐て吾欲住於日本國之三諸山と有るを云の事を古事記ふハ其神言能治我前者吾能共與相作成若不然者國難成ふ大國主神曰然者治奉之狀奈何

答言吾者伊都岐奉于倭之青垣東之山上此者坐御諸
山上神也と有て此ハ治奉を次ハ伊都岐奉と見え
たり是を以て曉り可一〇百不足八十坰手の説ハ此
ハ百不足之八十隈と有り所ハ就て下六百八十九丁ハ注す
可一〇隱ハ加久理氐と訓べし此も下六百九十一丁ハ云べ
一〇侍ハ記傳十四四十三丁ハ云ハ侍ハ佐母良比那牟と訓べし佐
母良布ハ佐ハ眞の意母良布ハ母流を延たる言なり母流
とハ何事ハ在れ心を著て伺ひ考へ居りを云ふ常ハ
物を守りと云も又人目を守りなど云も此意なり又
目を著て物を徒然と見りを守りと云も同ト又候風

傳十九十五百四ハ古語拾遺ハ大宮賣神侍於御前の事と注し又廿四下ハ清之湯山主三名狹漏彦八島篠神の下ハ注り出雲風土記ハ但八雲立出雲國者我静坐國青垣山廻賜而守詔と有り守と此の侍と相同ド

など云も泊舟の住き風を待伺ひ居りを云て同意ハ
り然れバ仰給ふ事なり有ハ奉りと伺居る意なり
凡て君の御前ハ在を佐母良布と云なり此より轉り
て後ハハ侍居る人を指ても侍と云ひ又其候ふハ所
を指ても侍と云り備又君の御前ハ在を云り轉り
て唯對ふ人を敬ひて云語なり已が上ハの事ハ凡て添言
事と成れり譬へバ見りを見侍りふ聞を聞侍りふと
云が如一備今此神の如此白一給ふい遠き黄泉國ハ
隱りなり も猶天神御子の大御前ハ伺候ひ居る意味
ハて遠ハ守衛奉りの意なり續紀十七卷詔ハ御世

御世ニ當テ天下奏賜ヒ國家護仕奉流事ノ勝在臣多
知ノ侍所ニ波置表氏與天地共人ニ不令侮不令織治賜
部宣ト有ハ其侍所ノ墓ヲ云ヒテ此モ意味同ト取要ト云ヒテ
其侍ノ說ハ然ル事アレドモ大國主神ハ今ヲデ現人
神ヒテ御在ー坐ケルトモ唯隱身ト成リテ給ヒフノ
ヒテ身罷リセ給ヘルカモ非ズ其御身其任ニハ八十隈
手ニ隱リ御在ー坐ルアレバ殊更ニ黃泉國ノ事アデ
ハ此ヒハ甚味氣無キ者アリ又石ノ宣命ニ侍所ノ
所ニ靈ヲ留ヒト云事ノ無ーハ非レドモ實ニハ其
逝宮ト云御有テ其ニ留事ト更ニ由無ー凡テ墓
ル證有ト已ニ傳十五卷四十一丁ニ安ーく注ルガ
如クアレバ此ニハ吁ハヂ墓所ニ留ヒト云ハ外國

の沈決ル又記傳ニ云ク書紀ニ時高皇產靈乃還遣二神
勅大巳貴神曰云ク夫汝所治顯露之事宜是吾孫治
之汝則可以治神事云ヒ於是大巳貴神報曰吾所治顯
露事者皇孫當治吾將退治幽事ト有リ幽事モ此侍
ニフ言ノ中ニ含レリ幽事ハ此上文ニ神事ト有ト一
事ヒテ神事ハ言ノ任ニ書ル字幽事ハ意ヲ以書ル字
アリ故ニ共ニ迦微碁登ト訓ベー舒明天皇元年御紀
ニ幽顯ト有リ此ヲ以テ然訓ベキ事ヲ思定メヨ偖今
ニリ皇孫ノ所知食ベキ顯露事トハ即朝廷ノ萬ノ御
政ヒテ現人ノ顯ハニ行フ事アリ幽事ハ其ニ對ヒテ

顯はに目ゑも見えず誰が爲とも無く神の爲に給ふ政ふり代て此世に在ゆる事は皆神の御心以て爲給ふるれども其中ゑも姑く現人の爲す事に對へて分て神事とハ云あり備今此大神の其神事を掌どり治めすも即皇朝の大政を幽りに助奉り給ふるれば侍らハ也と有ゑ其意ハ含れりと云あり然れば此世間ふ在と有り幽事ハ悉ゑ此大神の所知食す事なり備如此隱坐すハ顯御身の事上ゑ僕住所者と有ハ此國ゑ留給ふ御靈の鎮坐ゆ處と云あり此差別能爲ず混れぬ可し凡て神代の事ハ此現身と御靈との事を只一樣ゑ云傳へたる故ゑ混りハ一さ事多りゆ

取意と云れ侍らふて神事幽事の狀ゆ甚く明らけさと予が見る所其さハ次り異ある所有ゑ依て此序ゑ注す可きあり

右六百十ゑ注るが如く神賀詞ゑ國作五丁之大神手毛媚鎮天大八島國顯現事顯事令事避支と有る次ゑ乃大穴持命乃申給久云く八百丹杵築宮ゑ靜坐支と有ハ即此宮ゑ御在し坐し神事幽事と所治す御事ゆて實ゑ此の於百不足八十坰手隱而侍と有る所ゑ當れるが神事ハ右ゑ現事と書て現人事と云る對あり幽事ハ右の顯事と書て明所見事又鮮所見事の

△垂仁天皇二十五年御紀ニ見エタル倭大神ノ我親治天地官ト有リ是ニ國造ノ御事ト巡ラシ成シ行ハセ給フ由ヲ

對ふ瑞珠盟約章の幽宮と訶久理能宮と訓ミ又此
ふも隱而侍と有ふ依て迦久理事とも訓べきなり
古史徵ふ神賀詞ふも現事顯事と有以て同ト事を如
此ニ樣ふ云る事例リ知べし現事と顯明事神事と幽
冥事と事ハ一なれども宇都志事ふ加微事阿良波事
ふ加久理事と相對ふ語なり」と云り但此訓もハ何れ
も古訓なれども多く又私ふ
字と改たるあとハ取べし
備神事と云ハ現事の
對ふて現事とハ現人神の爲ニ行ひ給ひて天下を撫持たせ給ふ事業を云るが神事
と云も神の爲行ひ給ふ事業を云て現人神の輔相奉
ゝせ給ふ御所爲と申せり即生島神詞ふ生島能御巫
能辭竟奉皇神等能前ふ白久生國足國登御名者白氏
辭竟奉者皇神能敷坐島能八十島者谷蟆能狹度極鹽

沫能留限狹國者廣久峻國者平久島能八十島隨事無
皇神等能依左志奉故皇御孫命能宇豆能幣帛乎稱辭竟
奉久登宣と有る如此ふ御事ハ一も現人神の御力ふも
及バセ給ハざるふて此大己貴神の主ゞゝせ御在ー
坐ふ因れる所由已ふ祝詞講義及傳サ九ナ丁ふ注せ
る如くなる此等ふも神事ゝゝ云べき又崇神天皇七
年御紀ふ夢有一貴人對立殿戸自稱大物主神曰天皇
勿復爲愁國之不治是吾意也若以吾兒大田ゝ根子令
祭吾則立平矣亦有海外之國自當歸伏と見えたる此
神語驗有ゝ海外の國此御世ゝゝ歸化ひ參來る事と

成て次第に多く成り以行つゝ往くハ万國の悉くも歸化ひ仕奉(らしめ給ふ)る可く有ハ此大神の神事に因れる事申すも更なる者なりし其後の事を一二擧記すものハ

續紀卅五に天平寶字八年十二月是月西方有流星似雷時當大隅薩麻西國之堺烟雲晦冥奔電去來七日之後乃天晴於鹿兒島信に村之海次石自聚化成三島炎氣露見有如冶鑄之爲形勢相遠望似四阿之屋略と見えた

又神護二年六月己丑大隅國神造新島震動不息略と有り又宝亀九年十二月甲申去神護中海中有神造島其名曰大宍持神至是爲官社と云事の有る類ハ凡て

神事なる者なりけり然して其も神事の一ふハ在れども此に云ふ神事ハ其神の成し給ふ事業を申せるかと現人神の御世に成て國土經營り現事御在し坐を神ゝり輔相け奉ゝせ給へる由ゆて此神事ハ瑞珠盟約章に見えたる伊弉諾尊神功既畢云てと有る神功ハ其大神の御功業を申せり其と同じ御事なる者なりかゝ

右六百十六丁に注せる現事に引合せて見る可きなり先達の現事顯事を一ふし神事幽事を一に爲り說ハ然して幽事と云ハ右六百十七且て予が取ざる所是なり丁に注るが如く顯事を明所見事又鮮所見事と訓る其對ゆて此ハ天神御子の現人神と御在し坐て所知

食す大御政ハ並びて大國主大神の天日隅宮ハ御在
ー坐て行ハせ御在ー坐す大御政是なり世中の治乱
興廢ハ更ハも云ず人身の吉凶禍福の類誰か成すと
も無くして自然か止事を得べからずして其所ハ至
りなるも本より此大神の御心なて御在ー坐しける其
ハ崇神天皇七年御紀か詔曰中略今當朕世數有災害恐
朝無善政取咎於神祇耶何以蓋命神龜以極致災之所
由也於是天皇乃幸于神淺茅原而會八十萬神以卜問
之是時神明憑倭迹迹日百襲姫命曰天皇何憂國之不
治也若能敬祭我者必當自平也天皇問曰教如此者誰

神也答曰我是倭國域内所居神名爲大物主神時得神
語隨教祭祀下略と所見たり此大物主神と共ハ大己貴
神の御在ー坐す由ハ傳廿九十百丁ハ大三輪三社鎮
座次第を引て已ハ注せるが如ー是世中の治乱興廢
ハーも幽事ハ因れる的證なり又其四十八年御紀か
天皇勅豊城命活目尊曰汝等二子慈愛共齊不知曷爲
副各宜夢朕以夢占之二皇子於是被命浴沐而祈寢各
得夢也會明兄豊城命以夢辭奏于天皇曰自登御諸山
向東而八廻手槍八廻擊刀爭活目尊以夢辭奏言自登
御諸山之嶺繩組四方逐食粟雀則天皇相夢謂二子曰

組

兄則一片向東當治東國宜是遠臨四方宜繼朕位と見
元たる此二皇子共に御諸山に登せ給へる夢を以
て奏させ給へるハ即其大神に祈せ給へる事ハ此
御夢を以て天津日継を定奉せ給へる事ハ謂ゆる
幽事の御定に因りて給へる者にして是人身の吉凶
禍福共に其大神の御心に因る事を見奉り知べき確
證なるに若て古事記玉垣宮段品羊都和氣命の御事
と是御子ハ髯至于心前眞事登波受中略於是天皇患
賜而御寢之時覺于御夢曰修理我宮如天皇之御舍者
御子必眞事登波牟如此覺時布斗摩迩に占相而求何

神之心に宗出雲大神之御心故其御子令拜其大神宮
中略於是覆奏言因拜大神大御子物詔故参上來故天皇
歡喜即返蒞上王令造神宮と見元同天皇二十五年御
紀倭天神御言に然先皇御間城天皇雖祭記神祇微細未
探其源根以粗留於枝葉故其天皇短命也是以汝御孫
尊悔先皇之不及而慎祭則汝尊壽命延長復天下太平
矣と見元たる是人の病と命と共に幽事の方に治
させ給へる證文にて天神御子の所知食す顕露事と
ハ反對なる御事と見奉り知べき侍るなり　古の如
幽事と云ハ今日我こに身上に在る事共なるを悪し
く心得る時に死て後に往べき霊の上の事なるべし　思

△先頭京元皇三年御紀大御歌ハ弥野磨多我倶利底弥豆猪問謨阿良羅辛ヒ見元因なる如く中古より迦久礼ンを古ハ然なる例ハ下歌洋小委〻書せるが如し又中古の例ハ

六百九十三丁

ふるびい古書を能も備其顕事を天神本紀ハ幽明〻めざか説あり事と作て迦久礼多留迦微能許登と訓り古言ハ迦久理あるが其用例ハ傳廿三二百九十五丁ハ注るが如く源氏帚木三十六十ハ然る可き隈ハい能こり隠行き給ふれ若紫四十ハ何の至深き末摘花六十ハ少〻折殺りたり隠の方ハ立寄給ふ其陰ハ就て隠れ給へば若菜上七十五丁ハ此方ハ隠れの方ハて唯氣近き程なるが柏木四十一丁ハ砂子薄き隠の方ハ蓬所得良あり総角九十一丁ハ中納方ハ隠かへたる方ハ入給ひて暫たゝ御在り寄生ザセ丁ハ北面ハびやうの隠れなり〻又二十五丁隠れ

方〻寝殿へ渡給ふ御後手を見送るが東屋十九丁ハ猶忍びて侍らひ給ひ可き隠れの方の候ひぐ甚もゝ〻嬉〻〻あむ又二十丁然ぐば彼西方ハ隠かへたる處爲出て甚憤り〻けるこめれと然ても過い給ふ可くハ手習七丁ハ人騒が〻〻ぬ隠れの方ハあるむ伏せたりけるなど有て隠と隈と相通ふ言ありければ古事記の此ハ於百不足八十阿坰手隠而侍と有る即幽事を所知者〻御在〻坐ハ當れり侍るハ右ハ注るが如く物の側〻伺ひ居る事ハ〻在ければ人の爲す所業の善悪ハ就て各治めさせ給ふ大御政御在〻坐す謂

あるかて一條大閤御說か顯露之事人道也幽冥之事
神道也猶晝夜陰陽二而爲一人爲惡於顯明之地則帝
皇誅之爲惡於幽冥之中則鬼神罰之爲善獲福亦同之
神事則冥府之事非祭祀牲幣之礼也祭祀猶屬顯露事
と注させ給へるい誠か見徹給へり御說なて古來
此か勝れる無くもむ有けり此等の事共ハ第二一
書か就て注す可き事なてい在れども言でい得有ず
思ゆる所あるを以て驚々置なるも猶傳世三百十
丁か委しく云てもを此なて盡せり者と思ふ可〻
ず右の御文ハ壯子庚桑楚か爲不善乎顯明之中人得
而誅之爲不善乎幽間之中者鬼得而誅之明乎人明

乎自然者然後獨行と有か依て文を成させ給へり者る
り又千金翼方るり老子の語か人生天地氣中動作喘
息皆應于天地爲善爲惡天皆鑒之勿謂闇昧鬼神報之
勿謂小語鬼聞我色人爲陽善人自報之人爲陰惡鬼神
報之人爲陽惡人自治之人爲陰善鬼神治之故天不欺
人示之以影天不欺人示之以響此皆自然之符也又抱
朴子なも遲速皆受殃罰討天網雖疎終不漏也天高聽卑
其後必受斯殃也云何當以此敝然匍匐臆間乎人自不
能聞見神明而神明之聞見已之甚易也此何異乎在紗
帷之外不能察軒房之內肆其倨慢謂人不見己此亦如
竊鐘振物鏗然有色惡他人聞之因自掩其耳者之類也
と云り事の有るとハ實ハ此の幽顯の事を注せりが
如き者るかりし　○僕子等ハ上なも僕子等二神隨白僕之不
違と見元須佐之男命之御所段なも其矢羽者其鼠子
等皆喫也なと有り子等と記傳皆か古杼毋と有り明宮
段大御歌か伊邪古杼毋と詠せ給ひ万葉一二十六丁か去

來子等早日本辺ゐに依りて者あり○百八十
神ハ記傳十四四十六丁ハ毛〻夜曾賀徴と訓へり此大神
の御子等百柱ハ餘りて猶數十柱坐けるあり可し書
紀ハハ大國主神其子凡百八十一神と見えたり
出雲風土記楯縫郡佐香郷條ハ百八十神集坐と有ハ
只多くの神等と云事なり又雄略天皇十五年御紀ハ
百八十種勝部欽明天皇十三年御紀ハ天地社稷百八
十神推古天皇廿八年御紀ハ臣連伴造國造百八十部
皇極天皇元年御紀ハ百八十部曲なと有り此等百八
十と云ふ例なり」と云れたり此百八十神の事ハ次ハ

ハ違神者非也の所ハ注す可し○神之御尾前ハ記傳
ハ神ハ天神御子ハ歸順ひ奉仕る諸神を汎て指す云
り上の百八十神を指ふ如くあれども若然らハ其神
之と有べきハ唯ハ神之と有ハ然ハハ非ず尾前ハ前
後ハて俗ハ跡先と云ひ如し後世の軍陣なとハも
先鋒後殿と云事をハ重き任と爲ふが如く此事代主
神渠師として諸神の前ハ立り後ハ立て天神御子を
守護り奉仕くりとあり天武天皇元年御紀ハ高市社
ハ生事代主神と牟狹社ハ生靈神と二柱高市縣主
許梅ハ著りて吾者立皇御孫命之前後以送奉于不破

而還之焉今旦立官軍中守護之と詔給へる事をも思
合す可し是ハ立皇御孫命之前後と有ハ依ふ此の
神之御尾前も即天神御子の前後うとも見ゆれども
然ハ非ず彼前後ハ事代主神と生靈神と二柱前と
後とハ立給ふ由なる可し（下略）と云れたり但上ハ百八
十神者と有を承たる狀ハ見ゆれば其（爲）神之御尾前と
見る可しや然して此時の諸否（イナヒヒ）の御答ハ父大神うも先進
ミて事代主神仕奉らせ給ひけるハ建御名方神始ハ
爭ひ奉られしうども後ハ歸順ひ仕奉られし故ハ
二神うう大國主神ハ汝心奈何と問給ひけるハ僕子等

二神隨白僕之不違と申させ給ひて此の百八十神の
如きハ此うう以前ハ亦我子有建御名（方）神除此者無也
と申させ給ひけるう群ゐて同じく大國主神の御子とハ
申せども五柱の珍御子の列ゐハ御在し坐ざるう故ハ
事代主神其百八十神の御尾前と爲て御ゐ仕奉れる
ハ皆違ひ奉る神ハ非じとハて此ハ其歸順ふと否
うざるとの事ハ就て申させ給へるありけるう此第二ノ
一書ハ是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合
八十万神於天高市帥以昇天陳其誠款之至と有ハ此
の結とも云べきと文るうを以て味ふ可き者なり

但右ハ八十万神と云へバ此とハ別あるが如くあれ
ども此の百八十神ハ其御子等を云ひ八十万神とハ
御子等を始々て凡ての従神を
申せるある事云も更なる者あり然して此ハ其神の
御尾前と爲て天神御子の御尾前ハ仕奉らしめ給ふ
と云事あるる證ハ右の高市社の事代主神年狭社の生
霊神天武天皇の前後ハ立て不破ハ送奉らせ給へ
るかて灼き御事あるると其皇御孫尊の近守神と爲て
大御許近く御在て坐べき御幽契の起ハしも出雲神
賀詞ハ皇御孫命乃静坐年大倭國中天已命和魂年云
ゝ已命乃御子阿遲須伎高孫根乃命乃御魂年葛木乃
鴨能神奈備ハ坐事代主命能御魂年宇奈提ハ坐賀夜

奈流美命乃御魂年飛鳥乃神奈備ハ坐氏皇孫命能近
守神登貢置天云々と有る是其皇御孫尊の御尾前と
爲て仕奉らせ給へるある若て此後天神御子の天降
らせ御在て坐ける時ハ天八衢ハ参迎へ奉給ひて猿
田彦神と申すハ實ハ此事代主神なて渡らせ給へる
御事傳三十 十 百 丁 卅 二 二百六十四丁 ハ說注せるが如て是
其尾前ハ仕奉らせ給へる始る然して神武天皇東
征の御時ハも此大神其御尾前と爲て仕奉らせ給ひ
けるを思ひる事ハ周防國賀茂播磨國室津等の社傳
ハ賀茂大神をして其天皇と申傳へたるが上ハ山城

國鴨御祖神社に此天皇と御在ーー坐す事ハ鴨神饌記
に見えたる事傳三十十百丁に注るが如ーー加之其天
皇の太后も此神の御女姫蹈鞴五十鈴姫命に渡らせ
給ひ其御子天日方奇日方命ハーーも此御世に申食國
政大夫として仕奉られ綏靖天皇の大后五十依姫命
も此御女に坐て顕ハ後政を祐け幽ハ其御尾前
に仕奉り守らせ給へり御事御在ーー坐が故あり其よ
り後の御世〻〻の御事ハ姑く置て桓武天皇の大御
世に至りて今の平安宮に初國所知食て百王不易の
都と定めらせ御在ーー坐けるに已〻其御契の渡らせ

給ひて神名式に謂ゆる山城國愛宕郡賀茂別雷神社
名神大月次相嘗新嘗ハ事代主神ふれ御在ーー坐ーー賀茂御祖神
社二座並名神大月次相嘗新嘗ハ大己貴神玉依姫命御夫婦ゆて
鎮り給ひ葛野郡松尾神社二座ハ胸形中都大神事代
主神御母子にて渡らせ給ひ近江國滋賀郡日吉神社
名神ハ大比叡神に比叡神と申ーーて大己貴神事代主
大神御父子にて御在ーー坐て皇宮を取圍めるが如く配
分りて神代より鎮り御在ーー坐て此迂都の御舉を待
奉らせ給へるが如く御在ーー坐す事予一人常に靈ー
〻奇ーー〻奉る御事ある大國主神の此に天神に聞え

奉らせ給へる御事の天地の共動うせ御在し坐ざる
るも仰奉るゆも餘百有て言ゆも意ゆも及び絶たる御
契ゆハ坐しけり記傳ゆ此神後世まで神祇官の八神
皇の大御身を守護奉り給ふ由縁ありしくられた
の列ゆも入て祭られ奉給ふも全天
るい式ゆ謂ゆる神祇官西院坐御巫祭神八座の中の
辞代主神の御事なるゆ可し實ゆ理ゆ於て然も有ゆ可
き事なるゆ其神ハ天神ゆ坐て別なる由ハ傳サ二卷
五十五丁六十四丁ゆ注せるが如く此ハ鎮魂
ゆ就て祭らせ給へる神ゆ坐せハ一ゆ難爲し○違神
者非也ゆ悉ゆ歸順ひ仕奉ものあり記傳ゆ此ハ僕子
等百八十神の中ゆ一柱も違ひて背き奉るゆ非ずゆ
う百八十神者と云ふ此ゆ係て見べし非ず不有の意
なるゆ此まで大國主神の白給へる語なり下略ゆ有が如

し然ればゆ右六百二十四丁ゆも注るゆ如く此第二一書ゆ於
是經津主神則還昇報告時高皇産靈尊乃還遣二神勅
大己貴神曰今者聞汝所言深有其理故更條々而勅之
と有ハ此大國主神の申らせ給へる御言を持して天
上ゆ還昇らせ給ひて皇祖天神の御處分(ミサタメ)とハ伺奉り
せ給ひ更ゆ其大命を得奉りて還降らせ給ひ此よ
う其天神の行ひ下らせ給へる大御政を奉行ハせ給
へるゆて其八十隈手ゆ隱給へるハ其事成就へる後
の御事なるを古事記ゆ右の違神者非せ如此之
白而於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍云しの事

宣政文庫
圖書寮文庫

小續けたまはれば其の御厨の事ハ其大國主神の乞
奉らせ給へり神宮成て後ハ八十隈手ハ隱給へり
の御事あれば決めて語の脫たるあり故記傳ハ如此
之白而の下ハ乃隱也故隨白而の七字を補はれた
ども右の如く大國主神より天神ハ仰立るハ其天
日隅宮の御事ハ御厨ハ其ハ屬たる者ありけれ
バ如此之白而の次ハ二神の天ハ還上らして天神の
御處分を奉ハ又更ハ還降らして其大國主神の乞奉
らせ給へるハ任せて治奉れる事の無くてハ叶ハず
然して後ハ隱坐るありけれバ其間の文此ハ一枚計

国立公文書館
National Archives of Japan